

# 美濃のいえプロジェクト — 3年間の記録、そしてこれから

## Mino House Project-Activities for three years, and then

金山智子

KANAYAMA Tomoko

**Abstract** The MINO-house project has been a three-year-long project so far. This article reviews the project in a chronological way and leads to a significance of this project in the MINO community in Gifu prefecture. The project will seek a future looking prosperity of the MINO community based on the notion of public space to live a people's life and/or public common to share among people in the community.

**Keyword** : 美濃、古民家、パブリックコモン、居場所、地域コミュニティ

### 1. 美濃のいえプロジェクト概要

今年度で終了する美濃のいえプロジェクトの3年間の活動について時系列に振り返りながら、本プロジェクトの意義について報告する。その上で来年度から展開していく新たな活動について述べていく。まず、本プロジェクトの背景だが、これは2010年から開始された「美濃のまちづくり」が土台となっているが、当時担当であった入江経一元教授が以下のように報告している。<sup>1</sup>

2010年のi.Laboの大きな仕事として、美濃の商工会議所からきた「美濃のまちづくり」がある。美濃からソフトピアジャパンへ最初の話が持ちかけられ、情報産業課にその話が伝わり、情報産業課が主宰しソフトピアジャパンが運営するプロジェクトの形で、実質的な提案をIAMASが行うというものだった。当初は観光目的にセカイカメラのようなモバイルシステムを美濃に導入し韓国語や中国語にも対応させたい、という限定的な依頼（商工会議所）だったが、歴史的街区を有する美濃を知った上で、町のコミュニティを活性化するようなより広い視点のまちづくりをしようという趣旨にたって、大垣と美濃（3回）でi.Laboを開催し、多数の美濃の関係者をあつめて話し合いを持ち、いくつかの提案も行った。またFACEBOOKを活用したことから美濃の人々と広域の人々とのつながりも生まれた。今も美濃のコミュニティでは活発なイベントや勉強会などが続いている。

2012年春、入江元教授に同行して初めて美濃市を訪れた筆者は、うだつの町並みの美しさに心奪われた。同時に、町を散策しながら空き家が点在していることに気づいた。「ここで空き家借りて活動できないですか」と美濃市産業課の担当者に話してみた。過疎化や人口流出による空き家増加は美濃市でも課題であり、さまざまな事情から一般には貸しだされることのない空き家が増えていた。空き家物件の情報提供をちょうど開始した時期と重なり、後日、美濃市から物件をいくつか紹介された。関口敦仁前学長、三輪眞弘教授、入江経一元教授らと視察に訪れた時、そ

1 入江経一「RCICのこれまでと今後の展望から見る」情報科学芸術大学院大学紀要 第4巻 Vol. 4, 2012 pp. 15-16

のうちの一軒を借りる方向で借り主との交渉に入ったが、最終的な契約に至らなかった。その後、美濃市から、別の築 80 年古民家を紹介されたが、それはうだつの上がる町並みのど真ん中という、願ってもないロケーションにあった。立地条件の良さと古民家自体がもつ魅力が地域との連携プロジェクトにうってつけと評価して、2013 年 1 月よりこれを借り受けて整備に着手し、4 月からこれを「美濃のいえ」と名付けて、「美濃のいえプロジェクト」を本格的に開始した。

## 2. 活動 1 年目

上述した背景からも分かるように、美濃のいえプロジェクトは明確な課題や目的がはじめから設定されていなかった。むしろ、美濃のうだつの町並みの美しさや古民家の魅力を基盤として、そこで何かしたいとの思いを集めてスタートした。三輪車が入る土間、番頭が座って商いする板の間、古い竈が残る台所、細く急な階段、町並みを見渡せる眺めのいい部屋、中が見えない暗い屋根裏、板に穴が開いただけのご不浄、骨董屋に並ぶような家具や古道具、かつての住人を想起させる古い本や調度品、これらが家の中にそのまま残っている。プロジェクトでは、学生と教員が、この美濃のいえや伝統的な町並みと対話しながらさまざまな表現を生み出した。主な活動はイベント、ワークショップ、トークと多岐に亘った（表 1 参照のこと）。

7 月	美濃のいえびらき（参加者 80 名）
8 月	おばけ屋敷（参加者 200 名）
9 月	「ジョブズと禅～不世出のイノベーターを支えた教え」（参加者 30 名）
11 月	「笑う策伝～美濃学入門」（参加者 25 名） 「まちなか DIY～デジタル工作機械を使ったものづくり」（参加者 60 名）
12 月	「みんなでつくろう★ラジオオーナメント」（参加者 30 名） 「たちもじ～ひらがなの形を体感する参加型作品」（参加者 30 名）
12 月・1 月	冬の家（通行する人に向けたプロジェクション）
3 月	みのかげ（うだつの町の影絵&カフェ）（参加者 60 名）

表 1：1 年目の主な活動内容

参加者の多くは美濃周辺の住民や美濃の観光客だったが、ユニークな学生たちの発想・表現に対する反応や評価は予想以上に高い。その中で修士作品や年次作品の制作や活動に美濃のいえを使う学生も増え、イアマスが学外の表現活動を社会に打ち出す可能性を示すことができた。



地元の人たちからは継続的な活動をのぞむ声が寄せられ、観光客からは偶然訪れた古民家での創造的な時間と経験への驚きと喜びが伝えられた。また、古民家を使った活動そのものに対する社会的関心の高さも、今後の制作・活動を見通す上で参考になった。

初年度の活動では、うだつの町並みの商店主、和紙製造関係者、観光協会、周辺のクリエイターなど、地域の人たちとの関係が徐々に構築され、プロジェクトに参加した有志市民、教員・学生が、任意団体である「美濃デザインチーム」を設立した。これによってイアマス単体では実現できない企画を自治体の助成を得ながら展開することが可能となった。

プロジェクト初年度で最も印象的だったのは、何ととっても美濃のいえがもつ魅力である。さほど告知していないイベントでも、観光シーズンの終わった冬でも、何かやれば必ず参加者がある。これは活動内容というよりも、この「いえ」が持つ魅力によるところが大きいと学生も教員も身をもって感じていた。

### 3. 活動2年目

初年度に手をつけなかった庭を活用していくことが、2年目の目標となった。家の裏に奥行き深く広がる庭には、草木が鬱蒼と茂っていた。当初は、庭全体が見えなかったため、ひと月かけて整備した。伐採した草木は90リットルごみ袋50袋以上。作業を終えてすっきりした庭を見ながら、そこからさまざまなアイデアが出てきたが、その中でまず、「石窯を作る」に着手した。石窯は学生たちに設計・製作を任せた。活動中、常に入口の戸を開け、看板を置き、自由に家を見学できるようにした。観光用に整備されていない普通の古民家に関心をもつ人たちが多く、こういった人たちとのコミュニケーションが、イアマスの活動を知ってもらう上でも重要だったからである。

石窯の完成に合わせた「窯びらきの儀」セレモニー、石窯と一緒に調理しながら料理を食べるイベント「窯びらき」を開催したところ大勢の親子連れで賑わった。古い家や広い庭をバタバタと駆け回る子どもたちの様子を嬉しそうに眺めている母親たちから、「みんなでわいわいと集まったり楽しんだり出来る場所が大切」「こういったオープンな雰囲気がいい」といった声が聞かれた。美しく整備された、美濃のうだつの町並みは、多くの観光客にとっては楽しめる場所だが、その多くは、そこに暮らす人たちが自由に集まって活動できる場とされていない。以降、美濃のいえをコミュニティの人たちが自由に使える場所にすることを意識することになった。



2年目も活発な展開を目指した（表2参照のこと）。コミュニティの人たちの参加を意識した活動を増やしたが、それには主に二つの理由がある。一つは、石窯のある庭を活用することから、これまでの表現活動では出会わなかった地元の人たちと交流する中で、徐々に地域主体の活動へ

と展開してゆくことをねらったことである。このような場作りの活動を修士研究のテーマにする学生もあり、学生の表現活動の幅や内容も多様化をみた。

4月	「お茶処（花みこしの休憩スペース）（参加者多数）」
5月	「影絵屋」（参加者50名）
7月	「窯びらき」（参加者 70 名）
8月	「流し屋（流しそうめん）」（参加者50名） 「お化け屋敷」（参加者 200 名）
9月	「街に潜ろう窯で食べよう」
10月	「美濃トロック」（2回 各30名） 「Sweet Halloween」（参加者 30 名）
11月	石窯開放（毎週金土）（参加者10～20名）
12月	こよみのよぶね（製作者たち）

表 2：2 年目の主な活動内容

もう一つは、美術家の西尾美也さんとクリエイティブリユースの大月ヒロ子さんによる「町を縫う」という活動に触発され、地域で不用となったモノを使った活動を地域の人たちと一体となって美濃で展開することである。美濃の和紙工場の裁ち落としの和紙を大量にもらいうけ、それを活用したワークショップやイベント（美濃トロックと **Sweet Halloween**）では、地元住民や観光客と一緒に作業し楽しむ場を作ることができた。特に、和紙の紙縫りは、毎年恒例の花みこしを作るために必要で、地域住民たちによって作られている。美濃の年配の人たちにとっては慣れ親しんだ作業であり、地元のお年寄りたちが積極的に紙縫りづくりのワークショップに参加する機会を生んだ。このように、2 年目の活動は、地域内外の人たちが参加し、交わり、一緒に創ったり楽しんだりする場の創出をもたらした。



#### 4. 活動3年目

3 年目となった 2015 年は、「古民家から公民家へ」をテーマに掲げ、美濃のいえが地域の人たちの居場所や活動場所となるような活動へと展開した。町の人たちと意見を交換する美濃いえ会議、ハーブや野菜など石窯用の食材を育てるガーデンニングなど、誰もがこの場に参加できる機



会をつくった。庭の枯れた大きな松の木を、県立国際たくみアカデミーの大野生二先生に依頼して倒してもらった際、近所の人たちが見学に来たが、切った木を薪にして石窯でくべながら、調理に使って、皆で食事をする活動もおこなった。

地域に閉じられることなく、その場に多くの人たちが関心をもち、一緒に企画を考え、実践した取り組みとして活版印刷があげられる。美濃のいえプロジェクトに初年度から参加し、美濃デザインチームの代表でもある、丸重製紙の辻晃一さんが、不用になった活版印刷機と大量の活字を引き取り、それを美濃のいえに置きたいと提案された。プロジェクトでは、機材や道具類の設置、活字を置く棚の調達、活字の整理、そして、活版印刷の講習会を開催しながら、地域で関心のある人はいつでも参加できるようにした。また古い活字だけでなく、デジタル工作機械を使って自分たちでデザインした絵柄や文字のスタンプを活版印刷機で使うことにも挑戦し、活版印刷の新しい活用のあり方も研究していった。

ガーデニングや石窯での調理、活版印刷など、どの活動も「外から覗くことができた」ものであり、その場に人を巻き込むことができたことが、このプロジェクトには重要だった。これは、表の通りに面した大きなガラス窓から奥の庭までが見通せるという、美濃のいえの建造的な特徴があったからこそである。



展示に関しては、「衣食住+lifework」というテーマで、イアマス卒業生で芸術作家の廣瀬周士さん、衣装作家、建築家、農夫で構成されたF.A.C.E.Sによるグループ展がひと月に亘って開催された。美濃のいえと息の合った数々の作品展示では、表現者と来場者ともに古民家の魅力が再認識され、和菓子の木型を使ったワークショップでは日本の伝統的な文化に魅了された。



また、美濃のいえの前の通りから奥行き深い庭まで横断するように作られた長いテーブルで、食べたい人が一緒に食事をする「晩餐会」は、この家でなければ出来ない表現活動であり、今後の活動の新しい可能性を感じさせるものであった。

## 5. これから

美濃のいえプロジェクトの目的について、まちづくり、古民家再生、空き家活用、コミュニティアート、地域活性化といったキーワードを引きながら聞かれることが多いが、この取り組みは、そもそも美濃のいえの魅力に惹かれ、「ここで何かやったら楽しそう」「面白そうな表現活動ができそう」といった場の可能性が引き金になっている。それは結果としてイアマスの表現活動に留まらず、地域の人たちを「こういうことをやったらいいんじゃない」「こんなこともできそう」と動機づけ、参加を促し、プロジェクトを地域に開かれた活動へと発展させたと言える。

とはいえ、3年間の活動を改めて眺めると、現代社会で今求められているものと合致している。例えば、東日本大震災直後から被災地に入り、集会所「みんなの家」を建てた伊東豊雄さんが2013年に提唱した脱近代建築5原則が参考になる。これは、(1)内外の境界線を曖昧にする、(2)内外の中間に半外部空間を設ける、(3)風の通り道をつくる、(4)機能による分割をしない、そして(5)自然素材を用いるから成る。美濃のいえは、まさに今の社会で求められているこの原則をずっと昔に実践した建築であり、人々に与える心地よさや人が自然と集まる理由がそこから理解できると同時に、こういった家の力がプロジェクトの表現や活動に強く作用することにつながったといえよう。<sup>2</sup>

美濃のいえを、地域の人たちの居場所や活動場所にしたいという点についても、最近注目されている住むための「パブリックスペース」や「パブリックコモン」といった新しい概念によって説明ができる。自分の身の丈で世の中とつながることを可能にする中間領域としての「間」がパブリックコモンである。うだつの町並みに、パブリックコモンをもちたいというのは、現代社会の身を置く人々が共通に抱く欲求であり、それは人のつながりが希薄となった都市だけの問題ではない。都市同様に、美濃のような地方の市町村でも、古くからある伝統的な地域のつながりだけでなく、地域内外の人たちと固定化された関係ではなく流動的な関係でつながれるような場が求められていることも示唆している。<sup>3</sup>

2016年4月からは、美濃のいえプロジェクトと一緒に活動するようになったメンバーで新たに構成された美濃デザインチームが美濃のいえを運営していく。この家は、伝統ある町に暮らす多様な人の居場所、そして、コミュニティの縁側にしていくことを目的とし、まちの人々がさらに混ざり合うことで、コミュニティのコミュニケーションを活性化させていく。その中から、伝統をベースにした新しい文化やビジネスをうむ活動を創出していきたい。美濃のいえプロジェクトの活動の延長線上で、プロジェクトから見出されてきた美濃のいえの可能性や地域の人たちの想像力を具現化したものを次々生み出すことで、イアマスを通じた社会の触発となっていければと考えている。

2 五十嵐太郎・山崎亮編『3.11以後の建築：社会と建築家の新しい関係』学芸出版社 2014

3 乾久美子『小さな風景からの学び』TOTO 出版 2014

伊藤香織「公共空間の使いこなしカタログ」建築雑誌 Vol.130 2015.10

「パブリックコモンってなんですか？」ソトコト 2015 September